

「偉人かくあるべき」を越えて

岡崎 雄兒

《聶耳全集》編集委員会編
聶耳全集(増訂版)

A4判 全三巻(附CD2枚)

文化芸術出版社

五三、七六〇円

■はじめに

今年是中国国歌「義勇軍行進曲」の作曲者である聶耳(ニエアル)の生誕一〇〇周年にあたる。これを機会に増訂版『聶耳全集』が北京で刊行された。『聶耳全集』は聶耳逝去五〇周年を記念して一九八五年一〇月に刊行された。二七年の歳月が流れ、この時に編集委員会の顧問を務めた夏衍、呂驥、張庚、于伶、司徒慧敏、鄭易里の六名全員が鬼籍に入り、僅かに主編を務めた周巍峙が残った。編集委員に名を連ねた聶耳の二人の兄、聶子明、聶叙倫もすでに亡くなった。ただ実質的な編集責任者だった向延生(中国芸術研究院研究員)が今回も常務副主編として入っている。彼が中心になって編集にあたったと思われる。

増訂版の大きな特徴は、旧全集が上巻、下巻の二巻構成だったのに対し全三巻になったことである。

旧全集は、上巻が「音楽編」で聶耳が作曲した作品の手書きを含む最初に発表された楽譜写真、全作品の楽譜。作品の演唱・演奏がカセットテープ二本に収められていた。付録として新歌劇「揚子江暴風雨」の脚本、主題歌や挿曲などが使われた映画・話劇のあらすじ及び音楽作品年表で構成されていた。また下巻は、「文字編」で「文稿四二編」「書信五一通」と「日記」が収録されていた。この他多くの写真があり、付録として文稿年表、聶耳年譜、索引、英文訳名対照表があった。今回の増補版は、上巻が「音楽編」で変わらず、中巻を以前の下巻「文字編」

にあてた。そして下巻を通常の個人全集では異例の「資料編」として、聶耳に関する「記念文章」「回顧文章」「研究文章」を収めた。

では増訂版『聶耳全集』の内容を具体的にみてみよう。

■上巻・音楽編について

聶耳が作曲した作品の手書き原稿及び最初に発表された楽譜の写真、歌曲・民族楽器合奏曲楽譜は同じであるが、作品の演唱・演奏音響はテープからCDに変わっている。この中には作曲者の聶耳が映画「母性の光」で鈺夫役を演じた際に歌った「開礦歌」、新歌劇「揚子江暴風雨」で主人公の「老王」を演じた際に歌った

「碼頭工人」など四曲が含まれている。また今回新たに「アメリカ人へのバラード」で知られるアメリカの黒人歌手ポール・ロブソンが歌った「起来」（義勇軍行進曲）が収められた。

これは一九四〇年代初めにアメリカで抗日戦争への支援活動を行っていた劉良模が歌った「義勇軍行進曲」にポール・ロブソンが感動し、この歌をマスターしてレコード化したもの。一九四五年、連合国の勝利後、アメリカ国務省がセレモニーで演奏する各国国歌のうち中国については、「義勇軍行進曲」と決める上で大きな影響を与えたことで知られる。

また旧版で下巻に収められていた年譜が上巻に移った。これは向延生によるものだが、二七年の間に新たに判明した事実や研究成果を踏まえての改訂が加えられた。たとえば聶耳は医者之家に生まれ、三人の兄と二人の姉があったと書かれていたが、今回上の二人は前妻王氏が生んだ子供であったこと、「一九三二年四月二一日に中国左翼劇作家連盟の責任者田

漢に会った」とする記述の「二一日」を「二二日」に直し、さらに田漢が書いたものから次の箇所を紹介している。「彼は共産党と連絡をもちたがっていた。そしてもっと革命理論を学びたいと考えていた。彼は音楽を愛していた。彼は音楽という武器によって革命のために役立つ仕事ができないかどうかを知りたがっていた」などこれまでの記述に訂正を行うとともに内容を充実させている。

だが修正がなされていないところもある。たとえば年譜で神奈川県藤沢に行った日が、七月八日になっている。実際は九日である。七月八日の日記冒頭に旅行に出発するに当たって荷物の準備が煩わしいと書いており、ここで早とちりしたのであろうか。九日には朝の出発からの様子を書いているので間違いようがないが不思議である。もし日記の日付が間違えているということなら、中巻の当日の日記に日付が違う旨注記すべきだろう。なお王懿之の『聶耳伝』（上海音楽出版社、一九九二年）も八日出発と誤記し

ている。

この音楽編には付録として旧版にはなかった三つの文章が収められている。その第一は、向延生による「本書に『省師範付属小学校校歌』を収録しなかった理由」という原稿である。一九八五年の旧版編集時に編集委員だった聶耳の兄・聶叙倫とその娘聶麗華から、聶耳が一九二八年に作曲したとする《省師範付属小学校校歌》が出てきたので収録するかどうか提起がなされた。これは一部の人の回顧に基づくものだが、当時の編集委員会は検討した結果、これを収録しなかった。その理由は、まず楽譜の実物がなかった。聶耳が書いた一九三一年九月二一日の日記に練習曲の作曲を行っていることを書き、同二一日の日記に「初めての作品を完成させた」と書いていること。作詞をしたとされる聶耳の親友・張庚侯宛ての手紙や張の残した文章にこの校歌について触れたものがまったくないことなど九点あった。

この内容は二〇〇六年七月に玉溪市で

開かれた「聶耳音楽学術討論会」で報告されておられ、論文として雲南聶耳音楽基金会・玉溪聶耳音楽研究課題組編『聶耳音楽研究文集』（中国文联出版社、二〇〇六年）に収められている。

今回あえて「収録しなかつた理由」を入れたのは、玉溪市芸術創作研究所聶耳研究室・崎松主編『聶耳音楽作品集』（遠方出版社、二〇〇四年）に聶耳作曲の歌曲として三五番目に楽譜歌詞が聶麗華による「聶耳が書いた処女作」という文章とともに掲載されていることを踏まえてのことであろう。

その第二が丁学仁による聶耳の墓の変遷についてである。聶耳は藤沢の鶴沼の海で溺死した後、藤沢の火葬場で茶毘にふされ、遺骨は同年夏の終わりに友人が上海に持ち帰った。しばらく上海の親族方に預けられたあと、一九三七年一〇月に昆明市郊外の西山山麓の道路脇に葬られた。そして新中国成立後の一九五四年に昆明市人民政府がこれを修復し、さらに一九八〇年に龍門行きリフト乗り場近

くの林を整備し、現在の立派な墓ができた。この変遷が詳述されている。

その第三が、玉溪聶耳音楽研究課題組による聶耳に関わる重要な出来事の記録で逝去の一九三五年から二〇一〇年までの間に行われた聶耳を記念する行事や記念館の建設、研究図書刊行状況についてまとめている。

■ 中巻・文字編について

旧版の下巻にあたる中巻の構成は、一文稿 二、書信 三、日記で、付録として文稿年表が付けられている。また図片として文稿、書信、日記の写真が多数収録されている。

旧版との違いだが構成は変わらない。内容では、文稿の四二編は変わらない。「我之人生観」など一七編が学生時代の作文で、他は短篇小説、散文、詩歌、評論、ルポルタージュ、映画脚本などである。聶耳が所属する歌舞団のトップ黎錦暉を「黒天使」のペンネームで雑誌で厳しく批判し、退団する羽目になった「中国歌舞短論」など雑誌寄稿論文もここに

収められている。書信は、旧版では五一通であったが、増訂版では四通増え五五通となった。

四通とも聶耳が所属していた映画会社聯華公司の同僚であった宋廷璋宛のもの。宋廷璋は聯華を辞めて郷里の天津に戻り中学教師になっていた。一九三二年秋、聶耳が三ヶ月間北京に滞在していた時に書いたもの一通と、その後上海に戻ってから書いた三通である。最後の一通は目次に松下石郎宛とあるので、日本人宛の手紙が出てきたか！ と思ったがこれは宋廷璋が日本人に似ていることから付けられていた「あだ名」だったと注にある。

四通を通じて特段注目すべき内容は無い。北京行きの目的として、①脳震盪の後遺症があるのでその休養 ②遊び ③（黒天使事件によつて巻き起こされた）環境を変えることの三点を挙げている。手紙は新たに多数出てきたのではないかと期待をいただいていたが残念であった。

日記については聶耳が書いていたのは

一四歳の一九二六年の六月一日から二三歳五カ月、死の前日一九三五年七月一日までの一〇年間だった。年によつて数日分しかないものもあるが、二〇〇日以上書いた年もある。全体で七五一日分、この中巻で四〇〇頁以上を占める。日記は聶耳の成長過程を知る上で非常に有用であり、また当時の社会状況を理解する上で貴重なものである。

旧下巻・文字編にあつた索引と英文訳名対照表がなくなつたのは残念である。

■下巻・資料編について

一、記念文章三四編 二、回顧文章六編 三、研究文章四〇編 合計一四〇編が収められている。聶耳死去以降、親族や友人、同級生、同僚、専門研究者に

よつて夥しい数の回顧文や研究論文が書かれた。これらの文章は一九三五年二月、東京で留学生たちによつて編まれた『聶耳記念集』をはじめ逝去二〇周年、生誕七〇周年などに際して刊行された書籍や聶耳・洗星海学会、中央音楽学院など研究機関の研究誌に発表されたもの（その多くは内部資料）、「人民日報」、「解放日報」、「雲南日報」、「人民音楽」、「新音楽」等のほか多数のミニ紙誌に発表されたものである。

増訂版では、北京以外に玉溪にも編集部が設けられたことから、玉溪を中心に地方の研究者や縁故者の文章が拾われている。これは貴重である。下巻の一四〇編の中から紙幅の関係で二つのテーマに

ついで筆者が得た知見を紹介したい。まず聶耳の恋愛について。聶耳は学生時代の恋人・袁春暉を昆明に残しており手紙のやり取りによつて遠距離恋愛を続けていた。親は結婚を勧めるが聶耳はまだ早いと撥ねつける。しかし恋人の方は親の圧力に負け他の男と結婚してしまう。この恋愛の状況については、聶耳の兄が書いた『少年時代の聶耳』（新蕾出版社、一九八一年）と昆明在住の雲南省歌舞劇院の院長・徐演が一九八五年に袁春暉に会つて話を聞いた記録があつて、これに基づき王懿之『聶耳伝』や崎松「聶耳的初恋」（『聶耳与玉溪』民族出版社、一九九九年所収）は書かれているのだが、その記述は淡々としたものだった。

中国語の文法的意味と表現形式の対応を探る

中国語文法の意味とかたち

「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究

木村英樹 著

現代中国語の文法的現象を取り上げ、文法の意味と形態、および文法の意味と構造の対応のありようを明らかにする。自然言語の多様性と普遍性の観点に立つた考察と分析を進め、孤立語における文法のあり方を知る重要な知見を提供。第I部ダイクシスをめぐつて 第II部アスベクトをめぐつて 第III部ウイヌをめぐつて 第IV部構文をめぐつて 付：索引

A5判 ■ 3990円

吉川雅之 著

香港粵語「基礎会話」

丁寧な文法解説による基礎表現学習教材。5時間超のCD-ROM付 A5判 ■ 2940円

香港粵語「発音」

丁寧な発音解説と漢字八一〇〇字の発音辞典。ずっと使える参考書。CD付 B5判 ■ 3780円

新版出来!

白帝社

※価格は税込
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

そのため袁春暉は聶耳の死後結婚したとする伝記もある。失恋の痛手こそが聶耳が集中的に作曲活動に力を傾けたと考える筆者にとってはもの足りなかった。

しかし増訂版には、聞き書き全文が収められており、これを読むと二人の仲がいかに親密であったか、また聶耳への未練を残したまま他の男に嫁いでいった袁の無念がいかにかりであったかが伝わってくる。

また聶耳の袁にあてた手紙は、袁がそれを預けた友人宅が日本軍の空爆で焼失したとされていた。だが聶耳の母親の元に戻されていたことを示唆する遺品収集にあたった関係者の手記もある。

さらに聶耳の死をめぐる従来から聶耳は泳げるのに溺死したとはおかしい、日本の官憲或いは国民党政府の特務に謀殺されたのではないかとの説が根強く残っており、王懿之『聶耳伝』も読者の判断に委ねたいと書いていた。郭沫若が一九五四年に聶耳の墓碑に書いた「聶耳……不幸而死於敵国、為憾無極、其何以

致溺之由、至今犹未能明焉」（聶耳……不幸にも敵国で死し残念極まりなし、どうして溺れたのか、今にいたるも明らかでない）という末尾の数句の影響が残っている。

ようやく近年になって玉溪在住の聶耳研究家の崎松が「聶耳在藤沢遇難の死因探析」（『聶耳与日本』雲南人民出版社、二〇一〇年）という文章を二〇〇九年に書き、謀殺説は根拠が薄いと書いているのだが、ほとんど知られていなかった。この増訂版を機会に向延生が「聶耳死因的調査及郭沫若的墓碑文」を書き、これまで発表された論文・資料をふまえ、謀殺死を否定、脳震盪の後遺症など体調不良による溺死であろうと結論づけていることの意味は大きい。

本増訂版『聶耳全集』の刊行によって、ともすれば「偉人かくあるべき」或いは「左翼」史観に呪縛されていた聶耳研究がいま新たなフィールドに向かうことが出来るようになったことは喜ばしい。

（おがき・ゆうじ 東北公益文科大学）

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 8月号

人民中国雑誌社 定価 400 円 (税込)
[年間購読料 4800 円 (税込)]

【特集】遊んで
中日交流 観光地
ニッポン【連載】
中国伝統の技・
広西チワン族自
治区河池市・神
聖なる銅鼓の音
とカエルを崇め
る人々◆チャイ
ナ・パワーを読

み解く Part 2 国交正常化四〇周年に
思う◆中国共産党はなぜできるのか？
⑦香港・マカオの繁栄と安定をどうし
て維持できたのか？◆中国——日本
友好の絆⑦瀋陽◆科学的発展観とその
成果（上）◆活気が増す中国留学◆「欧
陽修書簡」なぜ日本で発見？

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。
03 (3937) 0300 (東方書店)
2010年1月号より『人民中国』デジタル版を「iBook」で販売しています。サンブル版の試し読み(無料)もできます。

<http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385>